

予防接種のミニ知識

【予防接種】

感染症の原因となるウイルスや細菌、または菌がつくり出す毒素の力を弱めて予防接種液(ワクチン)をつくり、これを体に接種して、その病気に対する免疫をつくることです。

【定期予防接種】

予防接種法によって対象疾病、対象者および接種期間などが定められています。公費負担(無料)です。

A類疾病の対象疾患は、ロタウイルス感染症、B型肝炎、インフルエンザ菌b型(ヒブ)感染症、小児の肺炎球菌感染症、ジフテリア、百日咳、破傷風、ポリオ(急性灰白髄炎)、結核、麻しん、風しん、水痘(水ぼうそう)、日本脳炎、ヒトパピローマウイルス感染症です。

【任意予防接種】

保護者の方が医師との相談により判断して受けることになっています。自費での接種です。

【生ワクチン】

毒性を弱めたウイルスや細菌を生きのまま接種するもので、自然感染と同様の免疫が得られます。接種後に体内で増殖が始まり発熱や発疹が出ることもあります。十分な免疫ができるまで約1か月かかります。

現行のワクチンでは、ロタウイルス感染症予防、BCG、麻しん、風しん、麻しん風しん(MR)混合、水痘(水ぼうそう)、おたふくかぜ、黄熱があります。

【不活化ワクチン】

ウイルスや細菌を処理して、免疫をつくるのに必要な成分を取り出して感染力を失わせたものです。免疫をつけるためには、通常一定の間隔で初回免疫をつけ、約6か月以降に追加接種をして基礎免疫をつけます。免疫を持続させるためには、数年間隔で追加接種を行います。

現行のワクチンでは、B型肝炎、インフルエンザ菌b型(ヒブ)、肺炎球菌、百日咳ジフテリア破傷風不活化ポリオ混合(4種混合)、百日咳ジフテリア破傷風混合(3種混合)、ジフテリア破傷風混合(2種混合)、不活化ポリオ、日本脳炎、子宮頸がん予防、インフルエンザなどがあります。

【副反応】

予防接種に伴って起こる身体的な反応で、頭痛、倦怠感、けいれんなどを言います。

[通常みられる副反応]

ワクチンの種類によっても異なりますが、発熱、接種局所の発赤・腫脹(腫れ)、硬結(しこり)、発疹などが比較的高い頻度(数%から数十%)で認められます。通常、数日以内に自然に治るので心配ありません。

[重い副反応]

接種局所のひどい腫れ、高熱、ひきつけなどの症状があったら、医師の診察を受けてください。ワクチンの種類によっては、極めてまれ(百万から数百万人に1人程度)に脳炎や神経障害などの重い副反応が生じることもあります。

【紛れ込み反応】

予防接種を受けたしばらく後に、何らかの症状が出現すれば、予防接種が原因ではないかと疑われることがあります。しかし、たまたま同じ時期に発症した他の感染症などが原因であることが明らかになることもあります。これを「紛れ込み反応」と言います。

【予防接種による健康被害救済制度】

予防接種によって引き起こされた副反応により、医療機関での治療が必要になったり、生活に支障が出るような障害を残すなどの健康被害が生じた場合には、給付を受けることができます。定期の予防接種の場合には予防接種法に基づく給付、任意接種の場合には独立行政法人医薬品医療機器総合機構法に基づく給付となります。